
友達という名の恋人

HIROYA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

友達という名の恋人

【Nコード】

N4218D

【作者名】

HIROYA

【あらすじ】

二人は恋をする！しかし不思議な方向へと流れていく…ぜひ一度読んでみてください！

第1章

第1章

く美香との出会いく

二人が出会ったのは
ちょうど3年前だった…

学校の帰り道を
和也^{かずや}が友達と二人で歩いていると

自転車で追い越していく
別の学校の生徒が
笑いながら通り過ぎていく

初めは二人組だったので
会話が弾んでいるだけだと思っていたが

次に一人で追い越していった生徒まで笑っていた

「ん？」

不思議に思った和也が
友達^{たかし}の崇に

「さっきの子…何で笑ってたんだと思う？」

と聞くと崇は

「何でだろ？意味わからねえな！」

と返した

まあいいかと気にしないで歩いていると

また和也達を追い越していった生徒が笑っている…

しかも今度は和也達を振り返りながら笑っている

「なんだ？」

絶対に自分達が笑われていると確信した和也達は
こんな会話をはじめた

和也

「俺ら今日は何もしてねえよなあ！」

崇

「うん！」

和也

「なあ、俺の顔になんか付いてるか？」

崇

「あ！付いてる！」

和也

「え！マジで？取ってくれ！何が付いてる？」

崇

「目と鼻と口…あと眉毛も付いてる…」

和也

「お前ふざけるなよぉマジで付いてない？」

崇

「まあゝあとは鼻クソぐらいじゃね？」

そんなくだらないコトを言っている

急に後ろから声がした

「何か付いてるよ！」

二人が振り返ると、一人の女の子が立っていた

そしてその子が

二人の後ろにまわり

和也の背中から何かをべりつと剥ぎ取った

それは

一枚の小さい紙だった…

その子は

その紙を和也に渡す

するとその紙には…

「注意！絶対に餌をあたえないで下さい」

と書かれていた…

和也は、恥ずかしすぎる…
そう思った

崇が隣で爆笑しはじめる

和也は少し照れながら
その子に言った

「ごめん…ありがとう！」
するとその子は

「うん、いいよ！」と言って歩いていった…

和也は爆笑しながら走って逃げる崇に

「お前知ってたなあ〜」

と言いながら追いかけていった…

実はそれは

学校の校門を出た時に
友達の勇二ゆうじが

「バイバイ！」

と言いながら和也の背中をポンと押した

その時に

付けられた紙だった…

崇はそれに気付いていたが

今まで必死で笑いをこらえて黙っていたのだ…

ここまで歩いてくる間に

何度も

「ぶはっ！」っと

吹き出しそうになった

しかし崇は

うまく鼻から抜いていた

和也達は普段からバカな事ばかりしていた

生徒指導室の壁に

バナナパンをくっ付けたり

ジャンケンに負けて

髪の毛を輪ゴムでまとめて

顔に落書きして帰ったり

シャンプーハットをかぶって帰ったこともある…

そのせいなのか

和也の学校の近くにある商業高校の生徒の中では

あの高校に変な二人組がいると噂になっていた…

とはいえ

今日はなにもせずに普通に歩いていただけ

バカな事をするぞと

気合いを入れている時は

いいのだが

不意にバカだと

かなり恥ずかしいものだ

自覚がないのに

自分だけ恥をかいた

和也は騙された気分だった

崇の背中に叫んだ

「俺だけ恥ずかしいじゃねーか！泣くぞ！」

崇は腹が痛すぎてコケた

その姿を見た和也も

「あはははは！」

面白すぎてコケる

二人はあほ…

いや、いいコンビだ…

そんなある日…

崇が学校を休んだので

和也は久々にバスに乗って帰っていた

和也はバスに乗るのがあまり好きではなかった

隣のクラスで

嫌いな女子生徒がいつもバスを利用していたからだ

だからいつも

崇と一緒に駅まで歩いて帰っているのだった

しかしその日は

嫌いな生徒が学校前のバス停にいなかった

だからバスに乗ったのだ

普段バスに乗らない雅人は

話相手もない…

ただ流れる景色を

ボヤッと眺めていた

すると次のバス停で商業高校の生徒が10人ほど乗り込んできた

その中に

この前、背中の紙を剥がしてくれた子がいた

その子は友達と二人で

和也の前の席に座った…

和也は

どうしようか迷ったが

その子の肩をトントンと叩いて声をかけた

「あの、この前はありがとう！全然気付かなくて」
するとその子は

「あゝ！うん…」

と言ってまた前を向いてしまった…

あれ？なんか気まずい雰囲気になってる？

そう思った和也はもう一度その子に声をかけた

「ねえねえ！」

その瞬間にその子はぱつと振り向いてこう言った

「前田 和也君だよね！」

「私、上原 美香^{みか}っていいいます！」

和也はびっくりして
こう言った

「え?! 何で俺の名前知ってるの?」

すると

こんな会話が始まった

美香

「えっと、今私の横に座ってる理沙^{りさ}の
友達が和也君の生徒で…」

だから理沙から和哉君の名前を教えてもらって
いつもバスから

和哉君のコト見てたから」

和也

「え?!」

美香

「いつもなんか顔に変な落書きしてたり、変な髪型してたり、なん
かかぶったり、だからなんかいじめられてるのかなあ…なんて私、
思っちゃって…」

和也

「あの…」

美香

「だからなんて言うかあの、その…」

美香のマシガントークはしばらく止まらなかった

そしてバスが駅に止まって三人がバスから降りる…

和哉が言った

「じゃあ、またねえ」

美香と理沙も

「バイバイ」と和哉に手を振った

和也は電車に乗ってからずっと考えていた…

あの美香は一体何が言いたかったのか…

だいたい話をまとめても

俺と崇が変な格好してるのを見られてて…

自分の名前を友達から聞いて知っていて…

あと…俺がいじめられてると思ってて…

あとは全く話がわからなかった…

でも…

よく見ると

なんか可愛い感じの子だったなあ…！

ちょっと天然っぽいけど…

そんな事を思いながら和也は帰っていった…

次の日から和也は

帰り道を歩いていて
横をバスが通り過ぎると
自然と目を向けるようになっていった

するとたまに

美香が乗っているのに気付くことがあった

信号待ちでバスと隣どろしで止まっていると

美香がバスの窓から笑って手を振ってきた

和也も一応笑って手を振り返した

すると崇とこんな会話が始まった

崇

「お前の友達？」

和也は

こいつ完全に忘れてるな
と思いながら…

和也

「まあ…友達ってゆうか…知り合いつてとこかな！ちょっと前に出会ったばかりだし」

崇

「へえ〜！けっこう可愛い子だったじゃん！」

いや…一回目は間違いなくお前もいたしな…と思いながら雅人は返す

和也

「ちよつと天然っぱいけどな！」

崇

「へえ〜！」

やっぱり

いいコンビだ…

それから

美香を見かけるたびに手を振ってあいさつしていた

理沙もだいたい一緒に乗っている

なぜか崇も一緒に手を振っていた

崇が手を振ると

理沙も手を振るようになる

和也はいつのまにか

可愛い笑顔で手を振ってくれる美香のコトが、気になりだしていた…

それから

数日が経ったある日…

和也は久しぶりに崇と一緒にバスに乗っていた

朝は晴れていたのに

帰りには雨が降っていた…

「なんだよこの雨は！」

もちろん二人とも傘を持っているわけがない

さすがに雨の日はバスに乗る生徒が多い

和也は

雨の日の湿度が高まる

バスの中が嫌いだ

なにか息苦しいし

胸が詰まる感じがする

それに人は多いし

ほとんど座れないからだ

崇は逆に好きだ

その理由は、喉がすぐく潤うし、窓が曇るかららしい…

和也には意味がわからない

しかし

今日の和也達は

タイミングよく席に座ることができた

次のバス停で

商業高校の生徒が大勢乗ってきた

その中に

あの美香と理沙がいた…

美香が

「あ！久しぶり〜」

と言って人を掻き分けて和也達に近づいて来た

和也は

「おっす！」と言って手を上げる

そして美香達に席を譲ってあげた

すると会話が始まる

崇

「よっ！昨日ぶり！」

和也

「なんでお前が」

和也

「あ！コイツ崇って言う名前！」

美香

「美香です！崇君いつも和也君と一緒に歩いてるよね！よろしくね
！」

崇

「よろぴこー！」

和也

「昭和の返しかっ！」

理沙

「私は理沙です！よろしくね！」

崇

「よろしー！」

美香

「この前はごめんね！一方的にべらべら喋っちゃって」

和也

「いや、ぜんぜん気にしてないよ！それに楽しかったしね！」

美香

「ほんとに？じゃあよかった！」

そんな会話は楽しく弾んでいった

その時にみんなで

携帯番号とアドレスを交換しあった

実は崇もこの頃から

理沙が気になっていった

それから

休みがくるとよく4人で遊ぶようになる

和也はどんどん美香をスキになってゆく

2カ月ほど経った頃

和也と崇はすっかりバスで帰るようになっていた

しかも…

なぜか先に崇と理沙が付き合っている

そして

和也と美香はいつも

崇と理沙に

早く付き合えばいいのと言われていた

そのたびに和也と美香は気まずそうにしていた

崇はその時の二人の気まずそうな顔が
かなりツボだった

和也がその夜

美香に電話していた

和也

「そついえば今日も崇達に早く付き合えって言われたね！」

美香

「そつだね！あの二人はラブラブだもんね！」

「あ！そついえばあれ…」

美香はそついう会話になるとなぜかいつも話をそらすのだった…

和也もそれには気付いていたのだ

だから和也はなかなか言いだせなかった…

もしかしたら

俺のこと本当はスキじゃないのかもしれない

そういう不安がいつも心のどこかにあった

和也は正直

美香の気持ちがわからなくなっていた

しかし

こわくて美香に聞くことができない

臆病になっている…

美香のコトが本当にスキだったからだ

実は

和也は今まで付き合ったことがない…

毎日和也の不安が心の中で交差して、色んな事を考えてしまう…

正直

毎日が幸せで

毎日が辛かった…

そんなある日

日曜日に4人で遊園地に遊びに行く約束をした

和也と美香がなかなか付き合わないので

二人には

そういう機会が必要なのだろうと思い
崇と理沙が計画してくれたのだった…

崇が和也に

「お前は遊園地で絶対に告白しろよ!」

と言ってきた

でももう和也は

今度の日曜日には絶対に告白すると決めていた

色々考えた結果

このまま不安な日々が続くぐらいだったら

一気に想いをぶつけよう

たとえ振られたっていい

真剣に想いを伝えても駄目だったら…

それはそれで

諦めがつくと思った…

第2章

第2章

く和也との出会いく

ある日

美香は理沙と二人でバスに乗っていた

しばらくすると

二人は思わぬ人を目撃した

それは

髪の毛を輪ゴムで二つにくくって歩いている
二人の男子高校生だった

そしてバスがその二人を追い越していくと

二人とも顔に落書きをされてあった…

すると美香と理沙は
こんな会話を始めた

美香

「え？なにあれ？」

理沙

「えゝ、ありえないんだけどぉゝ！」

美香

「やばくない？」

理沙

「かなりやばい！」

二人はお腹を押さえて笑いながら帰った

次の日

学校で友達と昨日見かけた二人組の話でもちきりになっていた

美香は

あの二人組がなぜあんな格好をしていたのかが
気になってしかたなかった

するとこんな会話が

美香

「あの人達いじめられてるのかなぁ？」

理沙

「それにしては笑いながら歩いてたよね！」

美香

「あゝ、そっか！」

理沙

「私あの高校に友達がいるから一度聞いてみる」

美香

「そうだよ、気になるよね…あの二人！」

それから

毎日のようにあの二人を見るようになった

変な格好をしている時もある

なにもせずに普通に歩いているだけの時もある

美香はいつのまにか

あの二人を見るのが楽しみになっていた

一週間が経った頃…

理沙が友達に

あの二人のコトを聞いて

美香に教えてくれた

理沙

「黒髪の方が中島 崇で、茶髪の方が前田 和也だってさあ」

美香

「そうなんだあゝ！」

理沙

「なんか学校でも馬鹿な事ばかりかしてるみたいだよ！」

美香

「そうなんだあゝ！」

理沙

「まあ学校では面白いって人気があるらしケド」

美香

「そつかあゝ！じゃあよかったねゝ！」

理沙

「なにが？」

美香

「あゝ、えっと…いじめられてなくて！」

理沙

「あゝ、そうだね！」

美香は

あんな格好で街を歩けるなんて、すごい度胸がある人達だと思っていた

そしていつのまにか

茶髪の和也くん…よく見ると…かっこいいじゃん！

と思うようになっていた

美香がある日

一人でバスに乗っていると

いつものようにあの二人が歩いている

しかも崇の方が

なぜかシャンプーハットをかぶっているではないか

美香は思わず

「シャンプーハット？」

と言ってしまった

美香はその二人を

バスの窓にしがみ付くように見ていた

そしてバスが信号待ちをしていると

ちょうどその二人が歩いてきて信号で止まった

バスから二人の姿を覗き込む美香…

すると二人の会話が聞こえてくる

崇

「次の信号でジャンケンしようぜ！」

和也

「わかった！じゃあまた負けた方が…」

バスが走りだしてしまった

バスを降りて電車に乗った美香は…急に笑いが込み上げてきた…

それは思い出し笑いだった

一人で電車に乗ってるのに笑いだしたら
頭のおかしい奴だと思われてしまう…

そう思った美香は
必死で笑いをこらえていた

次の日学校で
理沙にそのコトを話す

二人は爆笑していた

その日は
理沙と二人でバスに乗った

しばらくすると
またいつもの二人組が歩いている

今日の二人は普通の格好をしていた

理沙は
二人を見て笑っている

その横で美香が
やっぱり和也君かっこいいなあ〜！
一度話してみたいなあ〜

そんなコトを思っているとボソッと

「かつこいい」

と言ってしまった！
すると理沙が

「ええ〜！もしかして美香…あの二人のどっちかが…好きなの？」

美香は一瞬慌てたが

こうなったら仕方ないと
思い切って理沙に言った

「私…もしかしたら和也君がスキかも！」

理沙は

「ええ〜！」

と驚いた顔をしている

それから

電車に乗ってからずっと理沙は

「やめといた方がいいと思うよ！」

と説得してきた

家に帰った美香は

一人で考えはじめる…

理沙の言ってるコトもわかるような気がする

理沙からすれば…

なぜあんなおかしな人をスキになったのかな？

と思うだろう…

でも私は和也のコトが間違いなくスキだと思う…

まだ話した事もないケド…

よし！明日話そう！

美香は勝手にそう決めた

そして次の日

いつもより少し早めにバス停で待っていた

すると向こうからあの二人が歩いて来る

やばい！と思った美香は

とっさに下を向いた…

二人がバス停の前を通り過ぎると

美香は二人に見つからないように後をつけた

しばらくすると

二人が立ち止まって話をしはじめる

美香は今だ！と思い

まるで普通に歩いて来たかのように

二人に近づいて行く…

距離が近づくにつれて
緊張が増してくる…

あと3メートルという所まで近づいた時

和也の背中に白い紙が貼つてあるのを見つけた…

その紙には何か書いてあったのだが

美香は緊張しすぎて読めなかった…

美香は思いきつて二人に声をかける

「何か付いてるよ！」

美香は緊張で震える手でその紙を剥ぎ取った！

そしてその小さい紙を和也に手渡した

美香はもう緊張が爆発しそうで

まるで体中が心臓になったみたいにドキドキしていた

このドキドキの音が二人に聞こえてるんじゃないかと思うほどだった…

すると和也は言った

「うめん…ありがとう！」

すると美香は

「うん、いいよ！」

と言ってすぐさま歩きだした…

もつと話したかったケド

なぜか恥ずかしくなって歩きだしてしまったのだ…

でも…

なんか優しそうな人だった

美香は歩きながら

間違いなく和也がスキだと確信した…

美香は和也の

「ありがとう」の声を何度も思い出しながら帰った

そして3日後…

理沙は美香の気持ちをわかってくれた

二人は作戦をたてる…

今日もバスに乗って

もしあの二人がいつものように歩いていたら

次のバス停でバスを下りて話しかける…

*（あくまでも変な格好をしてなかったらの話）

そついう作戦だった…

いよいよ二人が
バスに乗ったその時…

なぜか後方の席に和也が一人で座っていた

しかも美香のコトを見ていたのか目が合った…

美香はドキッとして固まってしまった

すると

理沙が固まった美香の腕を引っ張って
和也の前の席まで連れていってくれた

そしてその席に二人で座ったのだった…

しかし

いきなり話しかけるのは
おかしいし…自分のコトを覚えてるかどうかもわからないし…

あまりにも突然すぎて

まだ心の準備ができてなかったのだ

美香の緊張が増してくる

すると和也が

美香の肩をトントンと叩いてきた

少しビクッとなった美香は振り返った

和也がこう言った

「あの、この前はありがとう！全然気付かなくて」

すると美香は

「あゝ！うん…」

と言った瞬間に恥ずかしくなってなぜか前を向いてしまった…

美香は正直やってしまったと思った…

理沙が美香の腕をツンツン押してくる

もうこれはいくしかないと思った

すると

和也はもう一度

「ねえねえ！」

と声をかけてきた

その瞬間に美香はぱつと振り向いてこう言った

「前田 和也君だよね！」

「私、上原 美香っていいいます！」

和也はびっくりした顔をしてこう言った

「え?! 何で俺の名前知ってるの?」

すると

美香のマシガントークが始まってしまった

和也は

「あの…」と混乱していた

美香の勢いは止まらない

理沙が

「ちよつと美香?」

まるで聞こえてないみたいだった

美香の横で理沙がポカァンとしていた

そんな事に気付くはずもない美香は

しばらくマシガントークを炸裂させていた

そしてバスは美香達が降りる駅に止まったが

美香の勢いはまだまだ止まらない

ドアが閉まり

バスが発進してゆく

さすがに和也が

「いったん落ち着こう!」

と言った

すると美香は

「あつ！ごめん！」

と言って

電池が切れたかのように止まった…

美香はさらに

やってしまったと思った

和哉が笑いながら言う

「俺らがいつも馬鹿みたいに変な格好してたから気になってたんだね

そつかあゝ、バスから見られてたんだあゝ！

あはは！なんか恥ずかしいなあゝ！」

するとバスは駅に到着していた

三人がバスから降りると

和哉が言った

「じゃあ、またねえゝ」

美香と理沙も

「バイバイ」と和也に手を振った

和也は駅に向かって歩いて行く…

美香と理沙は

自分達が降りるはずだった駅に向かって歩いていた

すると

こんな会話を始める

美香

「私…ひどかった？」

理沙

「うん、残念ながら…和也君は冷静に聞いてても
ほとんど…」

わからなかったと思うよ

あんな美香はじめて見たからびっくりしてさあ…！」

美香

「やっぱり？私どうしたらいいの〜！」

理沙

「でも過ぎたことは仕方ないから…
まあ次に会った時に

ちゃんと話せるように頑張ればいいんじゃない？」

美香

「そうだよね！それしかないよね！」

じゃあ私頑張る！」

そんな事を言いながら
二人は帰っていった：

次の日からも

和也達を見つけては
はしゃいでいた

するとたまに自分達が乗っているのに気付いてくれる時があった

信号待ちでバスが止まっていると

横に和也達がいた

どうしようかと思っていると、和也達もこっちを見ていた

美香は恥ずかしかったが、勇気をだして笑顔で手を振ってみた

すると和也も手を振り返してくれた

美香はすごく嬉しかった

これからは

緊張しないでごく自然に

友達みたいに和也達に接しようと思った

それから

和也達を見かけるたびに手を振ってあいさつした

するとそのうち

祟も一緒に手を振り返してくれるようになる

美香と理沙は毎日が楽しくなっていた

それから

数日が経ったある日…

その日は雨が降っていた…

美香と理沙は

「雨の日はバスに乗る生徒が多いから、たぶん今日は座れないね！」

と話していた

バスが来て

二人が乗り込むと

その中に

和也達が座っていた

美香は自然に

「あ！久しぶり〜」

と言って和也達に近づく

すると和也は

「おっす！」と言って手をあげてくれた

そして美香達に席を譲ってくれたのだ

美香は

和也ってやっぱり優しい人なんだと思った

美香はこの前の事を和也に謝った

美香

「この前はごめんね！一方的にべらべら喋っちゃって」

和也は

「気にしてないよ、それに楽しかったしね！」

と言ってくれた

それから会話は楽しく弾んでいった

その時にみんなで

携帯番号とアドレスを交換しあう…

理沙もこの頃から

崇が気になっていった

それから

休みがくるとよく4人で遊ぶようになる

美香はどんどんお和也をスキになっていった

ある日、美香は

理沙から相談を受けた

それは崇のコトだった…

理沙は本気で崇がスキになっていたのだ

2カ月ほど経った頃

崇と理沙が美香より先に付き合いはじめた

そして美香と和也は

いつも崇と理沙に早く付き合えばと言われていた

その夜

いつものように和也から電話がかかってきた

しばらくの間

楽しい話をしていると

和也が

「そういえば今日も崇達に早く付き合えって言われたね！」

と言ってきた

美香は

「そうだね！あの二人はラブラブだもんね！」

そしてすぐに

「あー！そういえばあれ…」

と話題をかえてしまった

美香は告白されそうな雰囲気になると
なぜかいつも話をそらしてしまう…

美香は今まで付き合ったことがなかったのだ

だから

なぜか告白の予感がするところになって
自分から避けてしまうのだ

なんでだろう？

こんなに和也がスキなのにどうして？

美香は自分で自分がわからなくなっていた…

そんなある日

今度の日曜日に4人で
遊園地遊びに行く約束をした…

美香は

告白されそうな予感がしていたのだった

でも、胸の奥で

まだ本当の心の準備ができてないような
そんな気がしていた…

最終章

第3章

く告白の時く

美香のクラスの友達に

好きだ嫌いだ

告った振った

彼氏ができた

別れた…

毎日のようにそんな事ばかり話していた…

はじめのうちは

みんな彼氏ができた嬉しそうにはしゃいでいるが

時間が経つと

ほとんどの友達に別れてしまっている…

そしてまた

新しい彼氏を探すのだ

理沙と二人で

廊下を歩いていた美香は

こう言った

「みんな付き合っても別れていくよね

恋って…一体なんなんだろうね…」

理沙

「そんなに深く考える事ないと思うよ！

和也君のコトが本当にスキなんだったら
普通に付き合えばいいと思う！」

美香

「うん…私も本当に和也のコトがスキだよ、

もし付き合ったら

毎日がすごく幸せなんだろうなあって思う

でも…どうしても

別れた後の事を考えてしまうんだよね…

毎日幸せなぶんだけ

毎日不安になってしまう

そんな気がして…」

美香は人をスキになったことはあつたが

ここまで

自分からアプローチして

半分ストーリーみたいないな行動をとってしまつほど
人をスキになったことはなかったのだ…

美香は

この恋が本当の意味で
自分にとっての初恋なんだという思いだった…

人を本当にスキになると

こんなにも嬉しくて…

こんなにも楽しくて…

こんなにも愛しくて…

そして、その想いが

強ければ強いほどに

こんなにも苦しいものなんだ…

そう実感していた…

その頃

和也は同じクラスの友達
勇二ゆうじが

「彼女に振られた…」

と言って

落ち込んでいたので

崇と二人で励ましていた

崇は普通に勇二と話をしていたのだが

和也は

話を進めていくにつれて、

どこか他人事じゃないような気がしてきた

そう

約束の日曜日はもう明日だったのだ

その日は

学校が昼までだったので

いつもの4人で

待ち合わせをして、昼ご飯を食べに行った

そして

いつものように話をした

崇

「いよいよ明日だな！」

美香

「楽しみだね！」

和也

「崇はおとなしくしとけよ！絶対に恥ずかしい事はするなよ！」

崇

「あはは！どうしようかなあゝ、暴れちゃおっかなあゝ！」

美香

「コラッ！」

理沙

「崇〜！絶対に…」

崇

「ウソでした！」

理沙

「よしよし！」

美香

「あはは！」

理沙

「明日は何から乗ろっかなあ〜」

崇

「それはもちろん俺からだろ〜！」

崇以外の3人が口をそろえて言った

「それはない！」

そんな感じで

楽しい会話が終わると

「じゃあまた明日な！」

と言って

4人は帰った…

その夜

和也はずっと美香のコトを考えていた

どんな場所で告白するか

どんな言葉で伝えるか

色々考えた後

「よし！明日は絶対に美香を恋人にするぞ！」

と言って

眠りについた…

そして

約束の日曜日が来た

美香と理沙は

みんなで行く初めての遊園地だからと

いつもより気合いをいれてオシャレして

待ち合わせの駅に向かって歩いていた

理沙

「今日もしかしたら告白されるかもね！」

美香

「え、そうかなあ～！そんな事ないと思うけど…まあ楽しみもっ！」

理沙

「そうだね」

一方

和也と崇も一緒に駅に向かって歩いてた

和也は美香への告白の事で頭がいっぱいだっただ

そんな和也に崇が話しかけてくる

崇

「お前はなにを緊張してるんだ？そんなのサラっと言っちゃえばいいんだよ

サラっと！」

和也

「そんなに簡単な事じゃないんだよ！」

崇

「俺はサラっと言っちゃたケドなあ」

和也

「おい、お前と一緒にするな！俺も色々考えてるんだから」

崇

「あ！そんな事より俺は気合い入れて、眉毛にラインを入れてきた！めっちゃめっちゃイケてるだろ？」

和也は崇の眉毛にラインが入ってるコトぐらい

今朝、会った時から気付いていたのだ

ただそこにコメントする余裕がなかったただけだ

しかもよく見るとラインの幅が太すぎてダサい

和也は

「おう！カッコイイじゃんイケてるぞ！」

と適当に言っておいた

そして…

「おはよう！」

待ち合わせの駅に4人が揃った

「じゃあ行くか！」

4人は電車に乗る

今日の美香はいつもよりもさらに可愛かった

和也

「その服すごく似合ってるよ！」

美香

「本当に？ありがとう！和也も似合ってるよ」

その横で崇が

崇

「今日の俺はどこか違っただろ！なんか気付いた？」

理沙

「眉毛でしょ！」

崇

「さすが俺の彼女！」

理沙

「失敗したの？」

崇

「え、あつ、うん！」

意味のわからない会話をしていた

4人が遊園地に着くと
みんなのテンションが一気に上がった

園内に入った瞬間に

崇は走る

そしてコケる

それを見ていた理沙は
他人のふりをする

4人は楽しむ…

2時間ほどみんなで遊ぶと

2組に別れた…

和也と美香は

少し小高い場所にあるベンチに座った

美香

「楽しいね！」

和也

「そうだね！」

なぜか4人でいた時よりも口数が減った

2人はお互いにどこか緊張しているように思えた

そこで和也が言った

和也

「あのさあ〜！俺達ってまだ付き合ってないじゃん…」

美香

「うん！」

美香

「あ！観覧車に乗りに行かない？」

和也

「うん、そうだね!」

また美香が話題を変えた

二人は観覧車に乗って

向かい合わせに座った…

和也

「さっきの話なんだけどさあ〜!」

美香

「うん!あ、景色がキレイだね!」

美香はまた話をそらそうとしていた

和也は美香の横に座って

美香の手を握った

和也

「美香、逃げないで聞いてほしいんだ!」

美香

「うん…」

美香は少しうつむいた

和也

「俺は…美香のコトが好きだ!」

美香

「うん、ありがとう」

和也

「美香は俺のコトをどう思ってる？」

美香

「スキだよ…」

美香の瞳から涙が零れる

そして和也の口調が少し強くなった

和也

「大スキなんだよ！美香のコトを想うと夜も眠れないんだ…」

和也の瞳にも涙が滲む

美香

「うん…」

和也

「それぐらい美香は俺の中で大きくて、大切な存在なんだ…でも…」

その想いを伝えようとするといつも

美香は話をそらす…

だからいつも不安で不安で仕方なかった…」

美香は大粒の涙を流しながら言った

美香

「ごめん…本当は私も和也のコトが

大スキなの
スキでスキでたまらない

でも…

今までこんなにも

人をスキになつた事がなかったから…

どうしたらいいかわからなくて…

不安で仕方なかった…

和也は二人がお互い臆病になっていたから

すれ違いがおこっていたんだと思つた…

和也

「美香も俺のコトを想ってくれているなら

その証がほしい…

だから付き合つてほしいんだ…俺と…」

美香

「でも付き合つてしまうといつか

別れが来るような気がして…恐いの…

友達にも戻れなくなっちゃったらイヤだから…

だから…私たち…

友達でいようよ…」

和也は

お互いがお互いを想い合ってるのに

付き合わないなんて

理解できなかった…

和也

「本当に友達の間までいいの？」

美香

「友達のままだったらずっと友達で
いられると思うから…」

和也を失いたくないの！

大切な人だから…

だから恋人みたいな友達でいたい…」

その時和也は

美香がそういう想いで
友達でいたいなら…

それでもいいと思った…

美香をそつと

優しく抱き締めた…

壊れてしまわないように

そつと…

大切な人だから…

和也

「俺は絶対…どこにも行かないから…
いつも

美香のそばにいるから

だから…

恋人みたいな友達になろう…

俺もそれでいいから

美香

「うん！ありがとう…スキって言うてくれて！」

和也は

美香が自分のそばに

いてくれるだけで

強くなれるような気がした

美香も

和也がそばにいてくれるだけで幸せだった

それからも二人は

その関係が続けていた…

もちろん周りは

二人が付き合ってると思っている

誰かに

「二人は付き合ってるんだよね？」と聞かれても

「うん！」と答えた…

そう答えておかないと

誰かに君を奪われるような気がしていたから…

だからみんな恋人だと

思ってた…

二人の中では

友達という名の恋人だったケド…

みんなには

説明してもわからないから

付き合つてると答えてた

それから年月が過ぎた今

君はもう

僕の横にはいない…

今思うと

友達という名の恋人なんて初めからなかったのかもしれない…

お互いを失いたくないから

傷つけないからただ

二人が

作り出しただけの言葉だったのかもしれない

僕達は付き合っていた

みんなの中でも

そして

二人の中でも…

最終章（後書き）

色んな恋の形がありますよね！いかがでしたか？最後まで読んでいただいてありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4218d/>

友達という名の恋人

2010年10月11日20時02分発行